

# 「～を得る」に関する一考察

孟 熙

キーワード：迂言的受身表現、文法手続きによる受身表現、間接受身、授受、動作性名詞

## 1. はじめに

日本語には「迂言的受身表現」と呼ばれるものがある。それは、例文(1)～(3)のbのような助動詞「(ラ)レル」を用いた文法的手続きによらずに、(1)～(3)のcのように、「～を受ける」「～を得る」のような語彙的な形式を使用して受身の意味を表す表現である。

- (1) a. 田中先生が一郎を注意した。<sup>1</sup>  
b. 一郎が田中先生に注意された。  
c. 一郎が田中先生に注意を受けた。
- (2) a. 国民が大統領を支持している。  
b. 大統領が国民に支持されている。  
c. 大統領が国民に支持を得ている。
- (3) a. いじめられっ子がいじめっこに反撃した。  
b. いじめっ子がいじめられっ子に反撃された。  
c. いじめっ子がいじめられっ子に反撃を食らった。

村木(1983)ではこのような語彙的な形式が用いられた表現を「迂言的うけみ表現」と呼んでいる。村木によれば、迂言的受身表現は助動詞「(ラ)レル」を用いた文法的手続きによる受身表現と同義性を持ち、交替できるとされている。さらに、「あう」、「あずかる」、「集める」、「得る」、「くろう」、「浴びる」、「招く」、「許す」などもこの類に属するとしているが、「受ける」以外の動詞については指摘にとどまっており、果たしてほかの動詞も「受ける」と完全に同様な性質を持っているのかについては疑問が生じる。

---

<sup>1</sup> 出典が示されていないものは、すべて作例である。

(4) a. 総理から臨席を得て、無事開校式を終えました<sup>2</sup>。

b.\*総理から臨席されて、無事開校式を終えました。

(5) a. ふとした偶然をきっかけにひらめきを得た。

b.\*ふとした偶然をきっかけにひらめかれた。

(4) (5) は村木で「受ける」と同様な迂言的受身表現とされる「得る」の文であるが、動作性名詞と共に起しているにも関わらず、明らかに受身文と交替できないことが観察できる。この類の動詞に関する先行研究は管見のかぎり、村木(1980, 1983, 1991)と孟(2012, 2016)以外にはまだなく、これらの構文の性質については解明されていないものも多くあるように思われる。また、孟(2016)では、「受ける」と共起する名詞の意味的特徴を考察し、「受ける」はプラスやマイナスより中立の意味を持つ語と共に起しやすいと述べたが、本稿では迂言的受身表現の中で最も典型的な動詞「受ける」と比較しながら、プラスの意味を持つ語と共に起しやすいと予想される「～を得る」を考察対象とする。

## 2. 先行研究

「～を得る」を研究対象とした先行研究はないため、「受ける」に関する先行研究を紹介する。

### 2.1 村木

村木(1980)では「語彙的な意味をうしなつて、文法的なはたらきをする」機能動詞について議論している。村木(1983)では「受ける」を取り上げ、その前に現れる計 142 語の名詞をリストアップしている。「受ける」の前に動作性名詞が現れる際、「受ける」は機能動詞として働き、その表現を「迂言的なうけみ表現」と呼び、対応する有標な受身形「-(ラ)レル」と同義性を保ちながら、競合関係にあり、交替できると述べている。

(6) a. 非政府軍は政府軍を攻撃する。

b. 政府軍は非政府軍に攻撃される。

c. 政府軍は非政府軍から攻撃を受ける

(6a) は能動文であり、(6b) は文法的手続きによる受身表現である。(6c) は「受ける」を用いた迂言的受身表現である。

---

<sup>2</sup> 動作主は二格名詞句によって表示される場合とカラ格名詞句によって表示される場合があるが、本稿では二格名詞句とカラ格名詞句の問題を取り上げない。

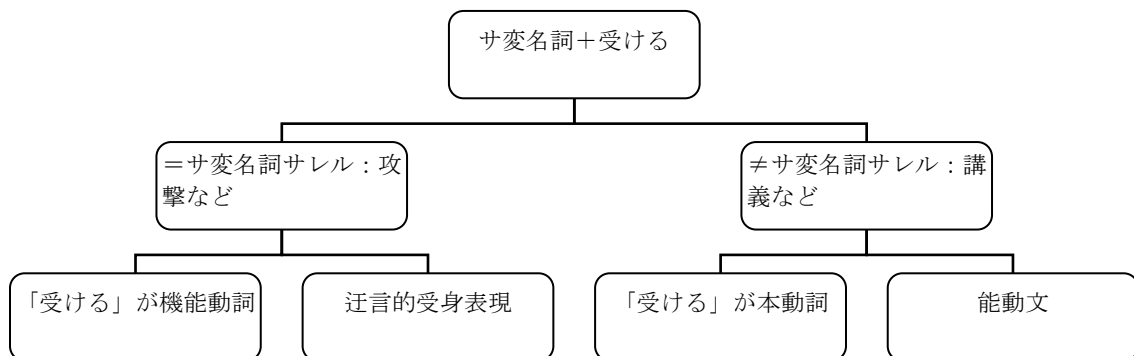
しかし、村木が挙げたリストの中には、(7)のように「-スル」の形にならないため、明らかに「(ラ)レル」と置き換えができない語なども含まれている。また、(8)のように「(ラ)レル」と置き換えると、文が不自然になってしまうような問題点も残っている。

- (7) a. \*復讐を口にする子供がジャーナリストを衝撃した。  
 b. \*ジャーナリストは復讐を口にする子供に衝撃された。  
 c. ジャーナリストは復讐を口にする子供に衝撃を受けた。
- (8) a. 先生が学生に講義する。  
 b. ?学生は先生から講義される。  
 c. 学生は先生から講義を受けた。

さらに、「受ける」のみでなく、「あう」、「あずかる」、「集める」、「得る」、「くらう」、「浴びる」、「招く」、「許す」などもこの類に属するとしているが、考察はしておらず、指摘にとどまっている。

## 2.2 孟 (2012)

孟 (2012) では村木 (1983) の問題点を解決しようと、主に「受ける」の前に現れる漢語サ変動詞の語幹である名詞の性質に着目し、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」を利用し、仮説を立てながら分析を行った。考察結果をまとめると、村木は「受ける」の前に動作性名詞が来れば、その表現は受身表現であるとしているが、そうではなく、受身表現であるかどうかは「受ける」の前に現れる動作性名詞が持ち合わせている動詞性と名詞性の度合いで決まることを明らかにした。孟 (2012) の結論を簡単に図で示すと、以下のようなになる。



【図 1】 孟 (2012) の結論

例文(8a)と(8b)が同義性を保たないのは、動詞性と名詞性を合わせ持っている「講義」という語に、動詞性より名詞性のほうがより強いからである。名詞性がより強いと、「講義を受ける」における「受ける」は「賠償金を受ける」の「受ける」と同様に機能動詞ではなく、本動詞として働くため、文も能動文であり、受身表現ではないのである。

### 3. 構文的特徴

「得る」の構文は(9)に挙げた三つが存在する。

- (9) a. 主格+名詞ヲ+得る
- b. 主格+動作主カラ+名詞ヲ+得る
- c. 主格+動作主ニ/カラ+名詞ヲ+得る

- (10) a. 彼が自由を得た。
- b. 日本チームが南アフリカチームから勝利を得た。
- c. 新しい大統領は国民にから支持を得ている。

(9a)は二格名詞句やカラ格名詞句がない文であり、bは動作主がカラ格名詞句でしか表示されない文である。cは動作主が二格とカラ格の両方で表示される文である。また、(11)のように、動作主がノ格を取って目的語の連体修飾語となり、「主格+動作主ノ/カラノ+名詞ヲ+得る」という構文もあるが、紙幅の関係上、本稿の研究対象から除外する。

- (11) 新しい大統領は国民のからの支持を得ている。

ここで、「受ける」の構文も見る。

- (12) a. リーマンショックで損失を受けました。
- b. 近所の方は彼から迷惑を受けた。
- b. いじめっ子はいじめられっ子からに反撃を受けた。

(12a)は動作主が現れない文である。bは動作主がカラ格でしか表示できない文であり、cは動作主は二格とカラ格の両方で表示できる文である。

すなわち、構文から見ると、「受ける」も「得る」も三つの構文を持っている。

### 4. 共起語の性質

村木(1983, 1991)では、迂言的受身表現における動作性名詞が文の実質的な意味を担い、「受ける」「得る」などの動詞はただ文法機能を果たす機能動詞であると述べていることか

ら、これらの動詞の前に現れる名詞が非常に重要な役割を果たしていることが分かる。そこで、これからの分析は「得る」と共起する名詞に注目し、考察を進める。

しかし、「得る」には、「有益な物事を手に入れる。自分のものにする。獲得する」という意味のほかに、「病気を得る」のような「好ましくない物事を身に受ける。こうむる」という意味、さらに「当を得る」のような「その時期・場所・気持ちなどにうまくかなっている」という意味もある<sup>3</sup>。本稿では「当を得る」、「病を得る」のような慣用句は研究対象から除外し、「手に入れる」という主語の身にものや行為が到着する意味を表わす「得る」を研究対象とする。

ここからはコーパスを使用し、実際の用例から「得る」の用法を見てみる。「得る」と共起する名詞の採集にあたり、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」を「中納言」で検索し (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)、そのうちの 500 例をランダムに使用した。

「得る」の 500 例を見ると、共起する語には「支持」、「協力」のように「-スル」の形を取り、明らかに動作性を持つ漢語サ変動詞の語幹と、「許し」、「たすけ」のような動詞の連用形、さらに「情報」、「ヒント」のような「-スル」の形を取らず、動作の意味を読み取りにくい名詞がある。便宜上、漢語サ変動詞の語幹をサ変名詞と呼び、動詞の連用形を動詞由来語と呼び、「-スル」の形を取らない語を一般名詞と呼ぶ。以下では、共起する語を動作性を持つサ変名詞、動詞由来語と動作性を持たない一般名詞に分けて考察する。

#### 4.1 共起語の自他

孟 (2016) では「受ける」を中国語の“受到”と対照し、それぞれと共起する語を考察し、動作性を持つ語はすべて他動詞、または準他動詞として使用できることを指摘した。では、「得る」と共起する語はどうだろう。

「得る」の 500 例から、慣用句のため分析対象とされない 35 文を除くと、異なり語数は 247 語となり、その中でサ変名詞と動詞由来語は 77 語現れ、一般名詞は 170 語現れた。本項の考察では動作性を持つものを分析対象とする。

サ変名詞及び動詞由来語の 77 語を観察すると、他動詞として使用できるものが多く<sup>4</sup>、自

<sup>3</sup> 『明鏡国語辞典』を参照した。

<sup>4</sup> 動詞由来語の自他は元の動詞に基づき、判断した。

動詞としてしか使用できないものは(13)に挙げた15語のみである。

- (13) a. 共感、納得、安心、満足、報い  
b. 参加、臨席、高揚、自立、分布、融合、潤い、ひらめき、ひろがり<sup>5</sup>

しかし、15語の中には杉本(1991)で提起されている「準他動詞」として使用できるものがあり、それを(13a)にまとめた。杉本(1991)によると、準他動詞は二格名詞句を取り、一般の自動詞と異なり、その二格名詞句が直接目的語のように振る舞い、直接受身文の主語になることができるため、ヲ格名詞句は取らないが、他動詞と変わらない文法機能を果たす<sup>6</sup>。

- (14) a. 周りの人たちは彼女に共感している。  
b. 彼女は周りの人たちに共感されている。  
c. 彼女は周りの人たちに/から共感を得ている。  
(15) a. 上司や先輩も彼に納得した。  
b. 彼は上司や先輩にも納得された。  
c. 彼は上司や先輩にも/からも納得を得た。

ここで問題となるのは(13b)にある準他動詞ではない自動詞として用いられる語である。まず、「参加」「臨席」の例文を見る。

- (16) 国家行政コースには、11カ国から参加を得て国家行政の近代化の基礎をテーマに約7週間にわたりそれぞれ実施した。(『公務員白書』、1990年)  
(17) 翌五年一月七日、細川重賢の臨席を得て、開講式が行なわれた。(徳田武、『江戸詩人選集』、1992年)

「参加」、「臨席」の文が分かりやすいように、簡単な文にし、さらに文脈に基づき、主語を示すと、(18a)(19a)になる。対応する能動文もbに掲げる。

- (18) a. 会議の主催者は国家行政コースに11カ国から参加を得た。  
b. 11カ国が国家行政コースに参加した。  
(19) a. 開講式の開催者は開講式に細川重賢から臨席を得た。  
b. 細川重賢が開講式に臨席した。

<sup>5</sup> 「面会」という名詞も現れたが、文語文である一例しかなく、現代語における「面会を得る」は非文となるため、除外した。「其時は既に此世の人ならざりしなり。早くより上京しながら生前今一度の面会を得さりしこそ口惜しけれ。」(影山昇、『内村鑑三と寺田寅彦』、1990年)

<sup>6</sup> 詳しくは杉本(1991)を参照されたい。

また、BCCWJ では「参加を得る」と「臨席を得る」の用例数が少ないため、『筑波ウェブコーパス』（Tsukuba Web Corpus:TWC）という 11 億語の大規模コーパスを NINJAL-LWP for TWC (<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>) を使用し、検索した。その結果、「参加を得る」は 775 回も現れ、「臨席を得る」は 7 回<sup>7</sup>現れたことが分かり、どちらも自然な文であることが分かった。

(18) (19) を見ると、「得る」構文は対応する能動文にはない項が現れていることが分かる。a の「得る」構文において、能動文 b の主語である「11 カ国」「細川重賢」に「カラ」が付加され、能動文にはない「会議の主催者」、「開講式の開催者」が新しい主語として現れている。すなわち、(18) (19) の「得る」構文の主語に立つものは他動詞や準他動詞のように行為を行う側が発した行為には直接関与していないが、その事態から何らかの影響を受けていることが分かる。この時の「得る」構文は文法的手続きによる受身表現の中の間接受身と類似しているように思われる。

- (20) a. 太郎は赤ちゃんに泣かれた。  
b. 赤ちゃんが泣いた。  
c. (太郎は(赤ちゃんが泣く)られた。)

(20a) は典型的な間接受身文であり、b は能動文である。c は能動文と間接受身文の関係を示す文であり、「赤ちゃんが泣く」という事態に直接関与していない太郎が受身文の主語となり、その事態から影響を受けているという意味を表す。「参加」、「臨席」の例文 (18) (19) を (20c) のように表示すると、以下のようになる。

(18') (会議の主催者は(11 カ国が国家行政コースに参加する)を得た。)

(19') (開講式の開催者は(細川重賢が開講式に臨席する)を得た。)

このように、「参加」、「臨席」が「得る」と共起する際、構文的には間接受身と類似している。ところが、意味から見ると、間接受身は被害、迷惑の意味のみを表すが、「参加を得る」、「臨席を得る」は明らかに主語に立つものにとって好ましいことである。寺村 (1982) では、はた目で見えていた事象より影響を受け、迷惑が生じることを「間接受身」とし、逆に好ましいことである場合には「～てくれる」「～てもらう」を使うと述べている。では、(18) (19) を受益、恩恵を表す補助動詞構文の「てもらう」と置き換えてみる。

<sup>7</sup> 「臨席」は日常的に使用される語ではないため、「臨席を得る」の出現頻度も低いと推測できるが、母語話者に確認したところ、自然な文と判断された。

(21) 会議の主催者は国家行政コースに 11 カ国に参加してもらった。<sup>8</sup>

(22) 開講式の開催者は開講式に細川重賢に臨席してもらった。

(21)、(22) は「を得る」を「てもらう」に置き換えた文であり、いずれも自然であり、同様な意味を表すことが分かる。山田 (2004) では授受を表す補助動詞構文には直接構造と間接構造があると述べている。直接構造とは、行為の方向性と恩恵の方向性が一致し、行為が直接受け手に向かっており、その行為の受け手と恩恵の着点が同一人物の場合である。これに対し、間接構造とは、行為の受け手と恩恵の受け手がそれぞれ存在し、恩恵の受け手はその行為、事態に直接関わっていないが、その行為、事態から恩恵を受けている場合である。

(23) a. 私は太郎に助けてもらった。

b. 太郎は私を助けた。

(24) a. 私は太郎に子供を助けてもらった。

b. 太郎は子供を助けた。

(23) において、「私」は「助ける」という行為の受け手でありながら、恩恵の着点でもあるため、「私」は直接に恩恵を受ける直接構造である。これに対し、(24) においては、「子供」が「助ける」という行為の受け手であり、「私」はその行為の受け手ではない。しかし、「太郎は子供を助ける」ことにより、「私」は間接的に恩恵を受けている。そのため、(24) は山田 (2004) でいう間接構造である。構文から見ると、(23) において項の増減がなく、a の主語は b の能動文の目的語であるのに対し、(24) においては b にない「私」が新しい主語として現れ、項が一つ増えている。

ここで、本稿で扱う「得る」が動作性名詞と共起する際の例文を見ると、いずれも「てもらう」と置き換えが可能であることが観察できる。

(25) a. 新しい大統領は国民に支持を得ている。

b. 国民は新しい大統領を支持している。

c. 新しい大統領は国民に支持してもらっている。

(26) a. 彼女は周りの人たちに共感を得ている。

b. 周りの人たちは彼女に共感している。

c. 彼女は周りの人たちに共感してもらっている。

---

<sup>8</sup> ニ格名詞句とカラ格名詞句の問題は別稿に譲る。



(25a) は他動詞、(26a) は準他動詞が「得る」と共起する際の例文であり、いずれも「てもらう」と置き換えができ、項の増減が見られず、山田 (2004) の名称を借りると直接構造である。ところが、自動詞の「参加」、「臨席」が「得る」と共起する際は、「てもらう」と置き換えができるが、項の増減が見られる。

- (27) a. (会議の主催者は) 国家行政コースに 11 カ国から参加を得た。  
b. 11 カ国は国家行政コースに参加した。  
c. (会議の主催者は) 国家行政コースに 11 カ国に参加してもらった。
- (28) a. (開講式の開催者は) 開講式に細川重賢から臨席を得た。  
b. 細川重賢は開講式に臨席した。  
c. (開講式の開催者は) 開講式に細川重賢に臨席してもらった。

このように、「参加」「臨席」は「得る」と共起する際、他動詞や準他動詞と同様に、「てもらう」と置き換えができるが、山田の名称を借りると間接構造である。また、本稿で考察した 500 例には現れなかったが、「出席」も「得る」と共起することができ、NINJAL-LWP for TWC を使用し、その使用頻度を調べると、53 例が現れた。

この場合、主語に立つものはその行為、事態から影響、詳しく言えば恩恵を受けており、能動文の主語であった行為の行う側が降格していることから、間接迂言的受身表現と呼びたい。これに対し、他動詞、準他動詞が「得る」と共起するものを直接迂言的受身表現と呼ぶ。

次に、(13b)の「参加」「臨席」以外の自動詞を見てみる。以下の例文から分かるように、文には行為の対象が存在せず、主語のみで事態が成立することが観察でき、無論二格名詞句やカラ格名詞句も出現できない。

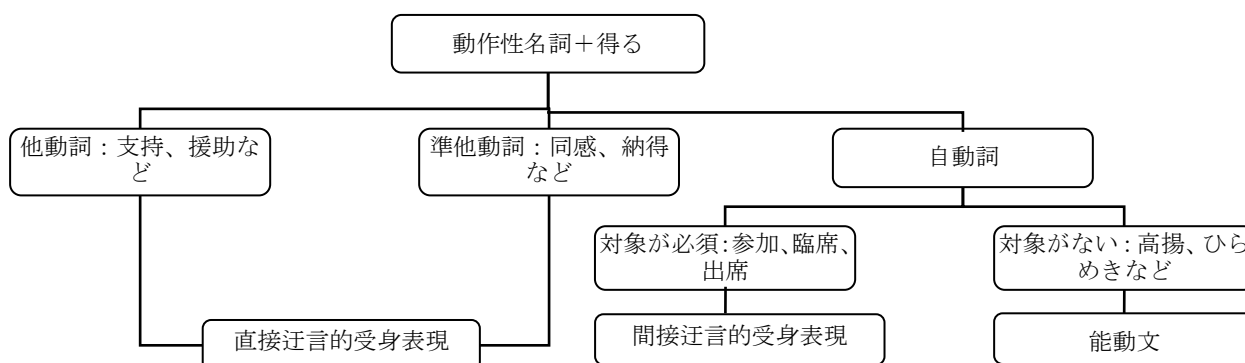
- (29) (略) 静かな高揚を得られるのであって、自分で発したのではなんの意味もないとわかったのである。(青野聰、『七色の逃げ水』、1988 年)
- (30) (略) 自由と自立を得た子どもたちは、現在の競争社会の中でも、自分を見失わないで、適応していく。(吉田きみ子『絵に見る子どものサイン』、1987 年)
- (31) その場で新たなひらめきを得て、補筆するということもしばしばあった。(児玉幸子、児玉邦夫、『ファミリーピアノのすすめ』、1989 年)
- (32) 器乐的要素と声乐的要素の理想的な融合を得、(略) (エウジェニオ・ガラ、『カヴァレリア・ルスティカーナ』、1989 年)

このような語は語数が少なく、コーパスにおいても使用頻度が非常に低い。主語のみで事態が成立し、主語を行為の受ける側と理解しがたく、二格名詞句やカラ格名詞句が出現できないことから、このような文は受身表現と考えるより能動文と考えたほうが良いだろう。前項で「得る」の構文的特徴を見る際に、(9a)には二格名詞句、カラ格名詞句が出現できないと述べたが、本項の「得る」と共起する名詞の自他の考察により、(9a)の構文は迂言的受身表現ではないと考えられる。

- (9) a. 主格ガ + 名詞ヲ + 得る
- b. 主格ガ + 動作主 ニ/カラ + 名詞ヲ + 得る
- c. 主格ガ + 動作主ノ/カラノ + 名詞 + 得る (再掲)

同様な自動詞なのに、「得る」と共起する際に異なる性質を見せるのは何故だろう。本稿で採集した 500 例の中に、自動詞でありながら「得る」と共起し、間接迂言的受身表現を構成できるのは「参加」と「臨席」の 2 語のみであった。前述した「出席」も含め、この 3 語は類似した意味を持つように思われる。すなわち、いずれも「～に参加/臨席/出席する」のように、行為の対象が必ず存在している。これに対し、残りの自動詞の「高揚」、「ひらめく」などは行為の対象を持たない。そのため、同様な自動詞であるにもかかわらず、「得る」と共起する際は異なる性質を見せるのであろう。しかし、本稿では 500 例しか見ておらず、ほかに間接迂言的受身表現を構成する自動詞が存在する可能性もあり、また行為の対象が存在すれば、間接迂言的受身表現を構成できるのかについても、より詳しく考察する必要があるため、今後の課題とする。

「得る」に関するここまでの考察を図に示すと、以下のようになる。



【図 2】「得る」の共起語の性質

孟 (2012, 2016) では迂言的受身表現の中で最も代表的な「受ける」を考察し、「受ける」と共起する語はいずれも他動詞か準他動詞として使用される語であることを述べた。これに対し、本稿で考察する「得る」は他動詞、準他動詞のみでなく、自動詞として使用される語とも共起できることが観察できた。また、すべての「得る」構文は「てもらう」と置き換えられるが、「受ける」は共起する動作性名詞により、「てもらう」と置き換えられるものと置き換えられないものがあることが観察できる。勿論、「受ける」と「得る」の置き換えもできる場合とできない場合がある。

- (33) a. 新しい大統領は国民に支持を受けている。  
b. 新しい大統領は国民に支持を得ている。  
c. 新しい大統領は国民に支持してもらっている。
- (34) a. 彼は親に影響を受けていた。  
b. ?彼は親に影響を得ていた。  
c. \*彼は親に影響してもらっていた。
- (35) a. \*11 カ国に参加を受けた。  
b. 11 カ国に参加を得た。  
c. 11 カ国に参加してもらった。

これは「得る」の語彙的な意味がまだ強く残っていることに原因があると考えられる。前述したように「得る」は「手に入れる」という主語の身にものや行為が到着する意味を表わすため、受益、恩恵を表す語と共起しやすく、「てもらう」と置き換えられる。これに対し、「受ける」は機能語化が進み、語彙的な意味がほとんど残っておらず、「～を受ける」という表現の意味は前に来る動作性名詞に預けているため、動作性名詞の性質によって表現の意味が決まる。「得る」と「受ける」の互換性について、より詳しく考察すべきであるが、別稿に譲る。

## 4.2 共起語の種類

「得る」と共起する 247 語の名詞の中で、動作性名詞は 77 語 (31.2%) 現れたのに対し、動作性を持たない一般名詞は 170 語 (68.8%) 現れ、動作性名詞の 2 倍以上にもなっていることが分かる。さらに、これらの名詞を見ると、「情報」「勇気」のような抽象的な意味を表わす名詞のほかに、「肉」「ミルク」など具体的な物を表わす名詞も数多く現れた。区

別するために、それぞれを「抽象名詞」、「具象名詞」と呼ぶ。

孟（2012, 2016）では「受ける」を考察し、「受ける」と共起する名詞を BCCWJ から 500 例採集し、分析を行った。500 例の中で「受ける」と共起する名詞の異なり語数は 214 語であり、その中で動作性を持たない一般名詞は 54 語現れ（25.2%）、動作性名詞は 160 語（74.8%）現れた。「得る」と共起する名詞、「受ける」と共起する名詞を比較すると、「得る」と共起する動作性名詞の数が「受ける」と共起する動作性名詞の数よりはるかに少なく、半数にも及んでいないことが分かる。

分かりやすいように、「得る」と「受ける」の共起名詞を表に示す。

【表 1】「受ける」及び「得る」の共起語

	受ける	得る
動作性動詞	160 語（74.8%）	77 語（31.2%）
一般名詞	54 語（25.2%）	170 語（68.8%）

孟（2012）では文が受身表現かどうかは「受ける」が機能動詞として働くかそれとも本動詞として働くかにより決まり、さらに「受ける」が機能動詞なのか本動詞なのかはその前に来る名詞の性質によって決まることを主張した。すなわち、動作性名詞が「受ける」と共起する際は、その名詞が実質的な意味を担い、「受ける」は機能動詞として働き、文は村木(1983)でいう迂言的受身表現である。これに対し、動作性を持たない一般名詞が「受ける」と共起する際、「受ける」は本動詞として働き、文は受身表現ではなく、能動文である。

(36) 6 位でたすきを受けた4 区の田中が区間 2 位の走りで 2 位に浮上。(孟 2012)

(37) 学習サークルが国の助成金を受けるためには、いくつかの条件を満たさなければならぬ。(孟 2012)

例えば、(36) (37) において、「受ける」の前に現れた「たすき」、「助成金」は動作性を一切持たない一般名詞であるため、このような場合の「受ける」は本動詞として働き、文は迂言的受身表現ではなく、能動文である。

本稿の「得る」も「支持」や「援助」のような動作性名詞と共起する際、「得る」が機能動詞として働き、文も迂言的受身表現であると考えられる。しかし、「情報」などの動作性を持たない一般名詞、特に「ミルク」や「パン」のような具象名詞と共起する際の「得る」

は本動詞として働き、文は能動表現であると考えられる。

(38) 人よりも早く情報を得たい。(『情報通信白書』、2001年)

(39) パンや、ミルクや肉を得るためには、トウモロコシやライ麦や小麦を植え、牛や豚や羊を飼った。(田村光三、『アメリカ地域発展史』、1988年)

また、孟(2016)は「受ける」と“受”を比較し、“受”は「受ける」より共起する一般名詞の数が少なく、特に現代中国語においては具象名詞と共起しないことから、“受”は「受ける」より機能語化の程度が高いと主張した。

そうすると、「得る」と共起する語の中で、動作性を持つ語が少なく、一般名詞、特に具象名詞が非常に多いことから、「得る」は機能動詞として使用されることが本動詞として使用されることより少なく、文も迂言的受身表現より能動文の場合が多いことが分かる。さらに、「受ける」と比較すると、本動詞として使用されることが「受ける」よりはるかに多く、機能動詞として使用されることが「受ける」よりはるかに少ないことから、「得る」は「受ける」より機能語化の程度が低いと言えよう。

## 5. まとめ

本稿は先行研究を踏まえ、まず「得る」の構文的特徴と関連付けながら、共起する語の自他について考察を行った。「得る」は「受ける」と異なり、他動詞、準他動詞のみでなく、自動詞として使用される語とも共起できることが観察できたが、行為の対象がおり、動作を行う側がニ格名詞句またはカラ格名詞句として現れる時のみ、文が迂言的受身表現であることが分かった。さらに、この場合の「得る」構文が先行研究で呼ばれる間接構造の授受補助動詞「てもらう」と類似しており、主語に立つ者は能動文にはなく、行為者が発した行為に直接関与していないが、その事態から影響(恩恵)を受けることが明らかになった。

また、共起する名詞の性質も考察し、「得る」は「受ける」より、共起する一般名詞の数ははるかに多く、機能動詞として使用されることが「受ける」よりはるかに少ないことから、「得る」は「受ける」より機能動詞化の程度が低いことが分かった。

「得る」と共起し、間接迂言的受身表現を作る自動詞はほかにもあるのか、「得る」と「受ける」は具体的にどのような場合に置き換えができ、どのような場合に置き換えができないのかなど、問題点はまだ多く残っている。これらを今後の課題としたい。

### 【参考文献】

- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 杉本武(1991)「二格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』pp.233-250, くろしお出版
- 村木新次郎(1980)「日本語の機能動詞表現をめぐって」『国立国語研究所報告』65, pp.17-75, 秀英出版
- (1983)「迂言的なうけみ表現」『国立国語研究所報告』74, pp.1-40, 秀英出版
- (1991)『日本語動詞の諸相』, ひつじ書房
- 孟熙(2012)「迂言的受身表現「～を受ける」について—漢語サ変名詞の特徴を中心に—」『筑波応用言語学研究』19, 筑波大学, pp61-73
- (2016)「「受ける」と“受 shou”の対照研究」『日中言語対照研究論集』18号, pp.73-91, 白帝社
- 山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院

### 【辞書】

北原保雄(編)(2011)『明鏡国語辞典(第二版)』大修館書店

### 【コーパス】

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)

筑波大学『筑波ウェブコーパス』(Tsukuba Web Corpus: TWC)